

特110

著原ソソグルベ

925

究 研 の 夢

譯 郎 太 初 崎 篠



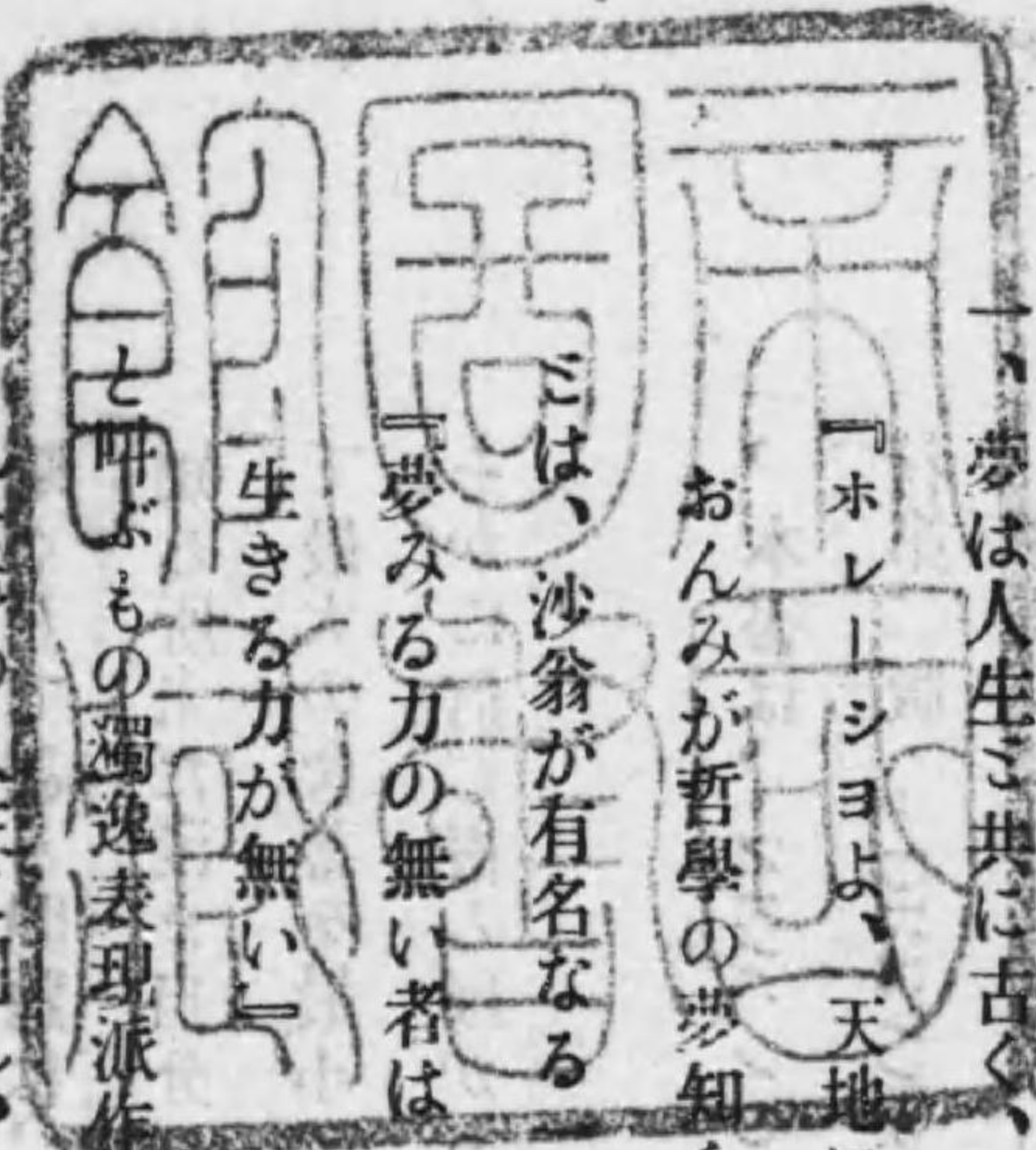
版 社 端 異



始



特 110
925



凡例

寄贈本

一、夢は人生と共に古く、また人生と共に新しい。

「ホレーシヨよ、天地には、なほも

おんみが哲學の夢知らぬ事の存す」

こは、沙翁が有名なる節であり、

「夢みる力の無い者は

生きる力が無い」

「と叫ぶもの」獨逸表現派作家エルンスト・トラアが痛烈の聲である。

凡そ夢の人生に關し、

人生の夢及び藝術に對する意義は如何

大正
14. 3 2
寄贈

畢竟、人生を夢むことは何んぞや？

斯くして起る問題は、やがて此の書全般に亘る題目であらねばならぬ、知る所未だ淺き自分は只本書が比類なき直觀ミ流麗の行文ミを以つてして最大の含蓄を最小の形式に要約された愛すべき論者であることを心ひそかに信じ得るばかりである。

一、本書は、NEW YORK 市 B. W. HUEBSCH 社、一九一四年十一月發行第二版「DREAMS」の全譯である。ベルグソンに就ては夙に紹介並に翻譯によつて既に知り盡されて居るかの感がある。然るにもか、はらず此の意味深き小著の譯出を書冊のかたちで未だ世に見ないことは少からぬ憾である。自ら揣らず、茲に之を公刊する所以である。もとより思はぬ粗漏誤脱も少からぬこと、畏れる、幸に叱聲教示を得て完全に近か

らしめんことを期す。

一、標題は別に MACMILLAN 社發行 H. WILDON CARR 譯篇「MIND-ENERGY」の内なる同じ夢の論說（之はスロツソンのに較べて所々に大いなる省畧がある）で殆されて居たのを其儘借用した。

一、譯中一再ならず術語に惱まされた箇所がある。面當な規約や慣用に對しては一々檢べ出す煩に耐れないので、そのまま發音を並べ書いて置いた。終りに臨んで一言したいことは、此の英譯本の存在を間接的に知らしめられた小熊虎之助氏（同氏著『夢の心理』）並に忙中にか、はらず草稿の校訂を依頼し、しかも充分の餘裕を準備せず、却つて迷惑をお掛した植村宋一氏に此の機會に於いて謝するに共に切に深厚なる好意の程を

よろこびたい、勿論翻譯上の責に對しては自分一箇の負ふべきこと又言ふまでもない。尙ほ本書の上梓については種々なる手違ひから原稿完了後約半歳の餘を遅れて出づるに至つたことを附記しておく。

大正拾三年師走九日夜記す

譯者識

内 容

緒言 (スロツソン) :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一
夢の要素 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	一五
夢は如何にしてなるか :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	二八
記憶の役割 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	三七
夢に於ける身體ミ心ミの状態 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	四二
知覺の機械作用 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	四四
夢の機械作用 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	四八
夢の無關心性 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	六〇
夢の迅速性 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	六五
熟睡中の夢 :	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	六八

緒言

有史以前すでに人類には夢を研究する事が行はれてゐた。古代の賢人ミ稱せられたものは各人も優秀なる夢の解説者であり、それを甘く、まことしやかに判断する才能をもつことは丁度、ヨセフやダニエルのやうに君王の恩寵を得る捷徑であつた。けれどもそれが甘く當らないでへまをやるミ朝廷をおはれ、あるものは死刑になつたものである。ある學者は五千年以上も埋没されて居たパピロンの古墳を採掘して骨折つて翻譯した楔形文字の書板が占星學の論文か夢の書物かのごちらかのものであるミこゝを發見したもし前者だとするミ、吾人はいくらか猶豫して見るが、そうでなくて後者だとすると輕蔑しなければすまない。こ言ふのは吾人は星の研究は、よしそれが獨り勝手な理窟ミ物知り振つた精神で述べ立てられてゐても、結局

は物理科學に導いて行つてくれるからである。所が一方夢の研究なるこゝ
 まるで痴人夢を語るこゝさながらに、こんど無益さを示してゐる。占星學
 からは天文學（星學）が發生した。しかし夢判斷からは——何物も發生し
 ないのである。

少くも現代に至つてそれは實際的な眞理となり、あらゆる國語で書か
 れた夢の書物なるものは安價に出版されて、その上夢の解釋はどんな種類
 の者にも適應し、貧窮な階級にこつては愉快なる生命となつてゐた。然る
 にもか、はらず世の心理學者は偶然にその研究を想像に及ぼして、思索の
 進行上これと聯合せしめるこゝいつた場合を除くの外は夢なるものに對して
 は殆ど一顧の注意だに拂はなかつた。けれども時代の精神は今や之を促進
 する機會を齎らし。實に夢の意味深き問題に關しては、かくも永らく無視し
 來つたのであるが、こゝに俄然こゝして勢力ある研究事物として烈しき論争

を世界中に呼び起こすに至つたのである。

この興味の復興の問題に對する一新觀察はこゝに本書を通して我が英讀
 書界に親近なるベルグソン教授によつて呈出せられた。その考察こゝいふの
 は吾人の心性の下層にある無意識、夢に表はれる意味に關した、記憶の倉
 庫を探究することであつて、こゝうした記憶には意味もなければ生氣もない
 ものだが、たゞ、過去におけるそれらの唯一なる生活であり目的であつた
 もので、機會あらば何時なりとも意識の上に出やう、よし夢の半意識の中
 へでも這入らうと骨折つてゐるものなのである。ベルグソン教授の適切な
 る比喻によるこゝ、吾人の記憶は恰も蒸汽釜の中に於ける湯氣のやうに壓抑
 されて、それが安全弁（遁辨）をなすこゝころの夢から追ひ出されるこゝいふ
 のである。

これは彼のフロイド教授や其他キイン派によつて示された比喻にくらべ

てはずつと單純なものである。彼等はヒステリーの症狀を其の患者に對して、患者自身では覺知はないが、しよつちう心を押へられてゐるところの秘された心配や感情に表現を與へるやうに誘導して之を治療するのであるかゝる混亂した心持の手が、りは通常夢や弛緩した意識にひこしい状態の中で行はれる。フロイド流に従へば夢こいふものにはいつでも何んらかの意味があるものだが、決して意味そのものとしてあからさまには表はれな
いこいふのである。それは願望や恐怖における象徴こなつたものか又はその表現であつて、日常吾々が徳義性に矛盾するこいふ理由でもつて意識中で拒絶したこころのものである。番人はそれらのものを押し返へすために意識の門の傍にがんばつてゐる。だが時々こうした歓迎されないこころの闖入者こもは變装してこつそり忍び込むのである。お芝居じみたフロイド流の手の中に入るこ此の理論はみだりに敷衍され、またその大部な精神分

折上の文獻は俗人にこつては彼の二拾五錢位ひな夢の本の中に矢鱈無精に轉がつてゐるこころの材料同斷、全くもつて不合理極る夥しいものを含んで居る。

吾々は彼等が神經病者の精神の底からすくひ取つたこころの醜怪異常を極めたあのお自慢の潜在意識こいふものを信するここは出來ない。

ベルグソンの觀察は自分には確にもつと同感出來る、より眞實なものこ思へる。吾々は一切の記憶を何處かに蓄へて居て、善も惡も同じく、愉快なここも不愉快なここも、一所くたにおいてゐるのである。その穴藏の下には子供の考へるやうに、夢魔があるであらう。だが吾々は今だにあの林檎（譯註——外觀美なれこも摘みとれば灰こなるこいふここ古書にいづるをいふ？）の例における胡魔化しのあるここを知つてゐる。それは一たび光を下にとるこ戸をパツタリこ閉めてす早く飛び出して來る。

メーテルリンクはまた、こついつた吾々の幼年時代のトリックを知つて居た。彼の童話劇における『夜の宮殿』の場で、夢魔やそのほか數多の影像を閉じ込めた籠をば恐れきつたチルチルがそれを開けるところがある。彼は此の時其の中へ彼等を入れて置くために扉を閉めきつてそれからもう一つのを開いて青い鳥の一杯いる愛すべき庭園を示す、そしてそれは一旦此の世の陽光にあふみ忽ち衰び死ぬところの鳥ではあるが尙ほかつ彼の不死にして永久に生きるあの「青い鳥」を探すことを續けるやうに彼を勵ます。斯ういふ目新らしい夢の場面はよくあの『おやすみなさい、そしてよい夢をごらんなさい』といふありふれた希願のあるのを見てもそこには何か意味深いところがある。その祈願といふのは爽快なる正氣と精神上の健康、純一なる思念と萬人にとつて善良なる意志を指してゐるのである。

ベルグソン教授の夢の理論は非専門的な言葉で述べられ、丁度彼の小冊

子である『笑の研究』(廣瀬哲士氏譯、慶應義塾出版局發行)と同様彼の普遍的な哲學の体系の中に於ける獨特な位置を備へてゐる。彼の哲學に於ける勢力ある特色は英讀書界に於ては他のいかなる同時代に存するところの体系のものよりも一層よく知られて居る。それは彼の著書が此の地ではフランスに於けるよりもつと急激に行はるることによつても示される。ベルグソン教授が今から二年前に合衆國を訪問した時コロンビア大學の講堂はかのコレツヂ・デ・フランスに於けると同様、その講堂の戸は押し合ひへし合ひの有様でそのときの雄辯な講述とその人格から迫り來る魅力とは彼の使命をしていや更に高からしめた。彼の哲學の實用的な特徴はウヰリアム・ゼームスやジョン・デユウイーの教化の影響をもつて表示されてゐるころの亞米利加人の資質に訴ふるころ大なるものがあつたのである。そして前二者の觀察点は歸せずして此の尊敬すべきベルグソンのそれと類似し

て居る。

現世紀の間、化學と生物學とはその創造的階程に關して記述するところから過ぎ去つて來た。人間は礦物、植物及び動物界の大君主となり。彼は寶石や芳香、藥品や食物を製し、かの自然の折にふれての恵みのまゝにまかせてゐたのこはひき換へて、今や己の好みのまゝに存分に適合さすところを學んだ。彼はその終局の意味に就いて適應せしめ政治のことに關してもまたその將來の爲に畫策することを自覺して來た。彼は原子を摘發して其の中にはかの太陽系のそれよりも更に聚大成をなせる小宇宙のあるところを見出した。彼は強度の熱に熔けゆく要素を發見し、またそこから病苦を治癒する光線について發明するところがあつた。彼は空氣中の電光を驅使しては牧獲に有用なる肥料を造り出した。彼は花なき沙漠に薔薇にもまごふ美はしき花を咲かせ海の外へ旱はいた土地を引き延ばした。彼は地上をばそ

の棲家とし、それをもつて永久にして不動なる條件を増大し行く願望によつて調和ある改造を行ふ。

かくのごとく近代人は、立案し、計畫し、製作して、原子の流れに就てはかのルクレチウスが文盲とペーレーの心中看過し來つたところのものを見出し得たのである。宇宙は嘗て人心にまつてはその過去と未來とについて決して知るを得なかつたものであるが、これ以來最早世に不可解なるものは一も存しなくなつたのである。永劫回歸の觀念はニイチエにおけるやうに人を驚かさなくなり。そんなこころはもはや不可能のやうに感じられるのである。機械論者は自然現象の説明を過ぐる世紀の間、全的價値を認めずて發展させた、そしてそれをば經驗上のこころに敷衍する。彼れはそれの不備な見方であるこころには氣付かないで、たゞそれを發展さすこころについてまだ不十分ださ感じるのである。

こういつた傾向の精神に對してあのベルグソンの『創造的進化』(金子桂邦譯の早稻田大學出版部發行がある)がある一種の靈感の力をもつて迫り來つたことは敢て驚くを要しない。人はかゝる向上的衝動を親しく彼等自身によつて感知する。この生命力 (vitalité) たる實に生氣なき物質が教化されない多くの年代を通じて争闘して居たものであつて、尙ほもその意味に對して或る方法により又は他の力によつてその究意を目がけて、常に活力や、知力や、個性の増大に向つて骨折つてゐるところのものである。

ベルグソンは不死の問題に關しては自ら手を染めることを嫌つてゐたのであるが、彼は最近に至つて其のこゝについて大いに説くやうになつて來た。彼はまた吾々にこゝつては不可能に思へるやうな死後の人格永存の實驗的證明をいつた深遠な研究の方面にまで進んでゐる。この事は少くも彼が最近に於て大英精神研究會の會長フリッチツシユン・サイテイ・ホア・サイキカル・レサーチなることを承認したこゝから

でも推論し得られる。一九一三年、五月二十八日、同研究會に於てしたその公開演説の中で、以心傳心テレパシーの問題を論じてそれから次に示すこゝくその連結コンタクトとしての心と腦との關係に就いて彼の理論を説明した。私はロンドン・タイムス紙の報導からそれを引用する。

腦の役割はある動作のうち其の記憶を延長するため、ある行爲の記憶を呼びもどすことをする。もし人がその腦の内部に於ける總ての状態を見るこゝが出来たら、その人は其處にあるものは單に心的生活の一小部分にしか符合してゐないことを發見するであらう。腦は動作に表示し得るこゝの心的生活からして之をわけなく抽出する。大腦の生活は交響樂シンホニーに於ける樂長の指揮棒の動作をつさめる精神的生活に對應する。

腦はそれ故に、その境遇に自らを調整することを心に許容する。それは生活の注意の機關である。それが物狂ほしくなるわけは、弱くなつてその心も早やその境遇に適應しないからである、それは迷ひ出して、夢をみる。種々なる精神的錯亂は即ちこれなないのであつて別議はない。しかもこれからしてそれは心の

幻影を限定するところの脳の役割のひとつを生じ、その行爲をもつて有効にする。これは吾々が彼の記憶に關して注意ぶかく觀察した點であつて、そこで脳の役割は唯だ現はれるに必要な記憶をとつて漸次吾々の過去の必要な部分を表はすものである。ある必要でない追想、或はまた夢の記憶は、決してその表出を處理しないのであつて、たゞ鮮明な追想のぐるりに朦朧とした縁をさつてゐる。それがよき吾々の感覺機關の知覺、はた重要な知覺であつても頭から驚くを要しないので、それは吾々の行爲に關係した吾々の感覺機關によつてなされたところの選擇と開鑿の結果である。しかし乍ら尙ほこれらの知覺のぐるりにはある特殊なもつと明白になつてゆく能力ある形態、またときとして變態な形態を伴つたところの知覺の暈縁がある。これらの事柄はかの物理学によつてなされたやうな精確さでもつて研究され得るであらう。

此の精神的活動状態の概念は、やがて見られるごとく、一九〇一年、三月二十六日に、心理學研究會に於ける講演のうちで初めて呈出されたベルグソン教授の夢の理論の基礎をなすものである。これは一九〇一年、六月

八日の『科學評論』中に公表された。その英譯は、著者によつて訂正されて、一九一三年、十月二十三日から三十日に亘る『ゼ・インデペンデント』(“The Independent”)に印刷された。こゝに現はれたのは書冊の体裁をもつた最初のものである。

此の論說中でベルグソン教授は吾々が夢の智識に關する數多の貢獻をした。彼は最初に、夢を見るこいふこゝは之迄想像されて來たやうに日常普通の知覺の過程と大して異なつたものではないこいふことを示した。それは記憶の想像の助けに依つて、物の形を像つたり解釋したりするため、有のまゝなる物質に對する感じと印象の二つを用ひる。こゝに、はた彼は私の解し居る限りでは、かの睡眠は無私(無關心)の状態であるこいふ嶄新なる呈出にかゝる觀察を發表した。これは數多の心理學者によつて採用されるに至つたこゝの理論である。此の説明については、その中で又種々

違つた張度を通じてそれ自身で進んで行く觀念を最初に考案した——この理論は彼の「物質と記憶」のうちで言及されてゐる。

一般讀者にとつて主要な興味のあるのは、自身で親しく見た夢の状態に就いて説明し得るこゝである。彼は恐くその唯一なる幻影の解釋をするにその説明を應用し彼はまたその夢中に就ける自己によつて、それとは不可分離の關係にある伴侶であるところの忘想に對しても何んらかの理解をもつに至るであらう。

一九一四年 紐育市に於て

エドウキン・イー・スロツソン

夢の研究

此處に論ずる題目は甚だ複雑であつて、困難にして曖昧をきはめ、あるひは心理學上のこゝに關し、又は生理學、形而上學の上にも及ぼす、あらゆる種類の夥しき問題を惹き起すのである。それ故これを完全に順序を立て、述べれば勢ひ浩瀚ならざるを得ない——が私は僅少の枚數しか有しないのだから、一切緒言めいたこゝは省き、緊要ならぬこゝは抜きにして直ちに質疑の核心に向つて進むことを讀者にことわつておく。

夢の要素

夢はかくの如きものだ。私は事物を認知してゐる、しかもそこには

何物もない。私は人を見てゐる。私は彼等に話してゐるやうに思へる、そして私は彼等がそれに答へてゐることを聞いてゐる、しかもそこには誰も居ないし私はまた何も話して居ない。宛もほんごうの事物やほんごうの人達がそこに居たやうなのに、醒めるごみんな消えて失つた、人も物も兩方ごも。一体なぜこのごごが起るのであらう？

まづ、最初に、そこに何物も存在しないといふごごは眞實であらうか？この意味は即ち、眠つてゐる間は醒めてゐる間ご殆ご同様に、そこには我等の目に、耳に、感覺にしかと觸れる實體ごいふべきものが存するのであらうか？ごいふことである。

眼を閉じて注意ぶかく自分の視野の中にあらはれる物を見てみる。ごいふご大概の者はこの点について疑念を抱いて、そんな物なんか無いではないかご言ふであらうが、それは彼等がなんにも見ないからの事である。疑

のないごごころは、實地に各自が觀察をしてみてもその上で自分を満足さす總計算をもつことである。で、ごごでもぜひ必要な注意の要件をそれに與へるごご、だんごご、多くの事柄を辨するやうになる。最初は、大概、暗黒な背景が表はれる。この暗黒な背景の上を時々きらきらした班点が行つたり來たり、上つたり下つたり、のろごごしづごご動きだす。もつごご稀には澤山な色彩の班点が表示はれ、時には大層不活潑であつたり、また時によるごご、これごご反對に、ある人々にごごつては、殆ごご他に比較するごごのできない程ありごごして輝いて見えるごごがある。これらの班点は何びたり縮んだり、たごごの形から色のあるものに變つたりして、絶えずそれからそれへごご移り變はつて行く。時にはその變化は遅く漸進的だが、時によるごご又目も廻るばかり迅速な施風ごごなる。此の幻影は何から起り來るのであらう？ 生理學者や心理學者は此の色彩の演技について研究した。「接眼殘

像「彩點」「閃光現發」こういつたものが其の現象に向つて學者達の與へた名稱である。彼等先生達はそれを網膜の循環中に於ける間斷なく起るところの微細な變更によるか、さもなければ眼球の上で閉じた眼瞼の壓迫が視神經の機械的刺戟を惹起したこゝなさに依つて説明して居る。けれども斯うした現象や名稱の説明などは一向益にも立たぬ事である。それ(夢)は普ねく起りその構成には——私は直ぐにこのことを言ふが——自分等の見るこゝろの夢の型にする主要な實質をもつてゐるのであつて、言ひ換へるこゝ『夢』なるべき要素』を備へるこゝである。

三十年か四十年も以前に、エム・アルフレッド・モーリー及び、殊にそれと同時に、聖デニスのエム・ド・エルベールが、睡眠に落ちて行く刹那に前述のこゝき色彩の班點が運動してその形像が結合し、お互に固り合つて、明確な輪廓をとり、いろいろな物の輪廓やまたは自分等が夢でよく見るあの

人間の形像をこつた人体の輪廓になるこゝを觀察した。こゝろが之は用心をもつてされた解釋の觀察だつたので、この時以來夙に半眠の状態にあつた心理學者を覺醒し此の研究について諸説を發出すやうにしたのである。それから最近に於てアメリカの心理學者、エール大學の、ラッド教授は、もつこ嚴格な方法を遺したが、それは然し應用の難かしいものであつて、そうするについては訓練を要するこゝいつた種類のものだつた。朝起きるこゝきに眼を閉じたまゝで數分間前夜の夢を續けてゐるこゝ、それは自分の視野から消れて間もなく記憶からもすつかり消れて行つて了ふものである。また人はその夢の形體や物象が段々に閃光現發に融け込んで行つて、あの眼瞼を閉じるこゝ眼で明に認知されるこゝろの彩色された班點でもつてみんな一所くたになるのを目撃する。ある人が、例へば、新聞を読む、それは夢である。その人は醒めて見るこゝ其處いらにはまだ新聞が残つてゐるやうだが

明確な輪廓は無くなり、たゞ黒い點のある白色の班點が彼方此方に見えるばかり、それが事實である。そうかと思へば夢は自分らを廣大もない海の上におく——この身をこりまいて大洋は廣がりその黄ばむだ灰色の波の彼方此方には白い泡沫の王冠がこびちる。さて醒めて見ると、それは一つの大きな班點の中にみんな消え失せて、半黄色や半灰色も、輝く班點でもつて散らかつてしまふ。そうした班點は其處に在つたし、きら／＼輝く點々も其處に散在して居た。睡眠中には、この目に見える塵埃が吾々の知覺に實際現はれるものであつて、またこの塵埃こそ即ち吾人が夢の製作に用立つところのものなのである。

こはいへ只之のみで十分であらうか？ 尙其の上に視覺の感覺についても考究し、加ふるにかの外界の事物より來つて之を聯結する凡て内面的に呼ばれてゐる視感覺についても同じく考究されねばならない。眼は、閉じ

たとき、まだ影を光を見分け、其上に、一々の光は異つた或る外延にいても區別を立てる。この光の感じは、何も無いところから流れ出して、吾人の夢の凡ての奥底に横はつてゐる。例へば、蠟燭を不意に部屋の中で點もすこ、眠つてゐる人に暗示を與へる、もし其の人の睡眠が左程深くなければ、夢に火の想念を起させて、建物の燃ゆる觀念を浮ばせる。私はこの事柄に關してエム・チスサーの二つの觀察を引用しやう。

『B——レオンはアレキサンドリアの劇場が火事のいつてるのを夢に見た、火焰はその建物をすつかり取巻いて燃えてゐる。突然彼は市の公開廣場の内の噴水の真中に前後不覺でゐる自分自身を見出した。火の手はその水邊を圍んで立てられた柱を繋いだ鎖に沿つて擴がつてゐる。こ彼は火事のいつてゐる、バリーに居るこを知つた。彼は怖ろしいいろんな光景に

出合つた。彼は跳ね起きた。と彼の眼は彼の寢床のそばを通つて行く夜番がさけた暗い提灯から、ちら／＼投げ出される光線を捉へた。

M——ベルトランは自分が以前に務めたここのある水兵になつてゐる夢を見た。彼はフランス要塞へ、ツーロンへ、ロリエへ、クリミアへ、コンスタンチノーブルへ行つた。彼は稻妻の光るのを見たり、雷の鳴るのを聞き、大砲の口から火の飛び出すのを目撃して自ら戦闘の一員になつてゐる。彼は跳ね起きた。Bと同じく、彼もやはり夜番の提げてゐた暗い提灯から射出する光線の閃で醒めたのである。』こう言つたのが屢々突然な光りによつて惹起こされる夢である。

これこは大きに異つた例は月の光のやうなものによつて隱に連続的に暗示される事柄である。A、クロウスは或日眠から醒めしなに夢の中で若い娘の像をして表はれてゐるものに向つて腕を伸ばしてゐる自分を認めたこ

こについて言つてゐる。それは段々この像が自分の方に投射する月光の中に溶け込んで行つたさういふことだ。月の光線が、眠つてゐるもの、眼を撫て、そのものに處女の幽霊を呼びこしたなごさういふ夢の例を引用するこは奇妙な話ではある。こんなこからしてかのエンデイミアンの傳説——エンデイミアンは牧羊者であつて、彼が眠つてゐる間は愛をもつて襲はれる、月の、あの、女神セレーネのために、永久の眠りに包まれてゐる——の古い出所を考へられはしまいか？

私は視覚上の感覺については既に説いた。そしてそれは主要な事の一つである。が其上に聽覺上の演すべき役割についても説かねばならぬ。先づ言ふべきことは、耳はその内部的感覺を有してゐることである、そしてあのがやがやいつたり、ちんちんいつたり、ひゅうひゅう鳴りわめく感覺は醒めてゐる間はそれを孤立さすこも覺知することとも困難だが、一日眠り

に入るこ、判然と區別することが出来るのである。尙其上に、眠につく時には、外面的な音響も繼續してゐるこことである。家具のキィキィいふ音、火のバチバチはぜる音、雨の窓を打ちつける音、風が半音階の音階でもつて煙突の中をかき鳴らす音、こうした音響が眠つてゐる者の耳にやつて来て、その夢をその場に應じて、會話に、歌唱に、叫聲に、音樂其他に轉用するのである。シツサーはアルフレッド・モウリーが寢てゐる耳の中へ火箸を突き込んだ。こ彼は直ぐに警鐘を聞きつけて一八四八年、六月の出來事と呼び起した。こうした觀察や實驗は夥しい。けれども取急ぎ言つておきたいこは吾々の夢で音響は色彩におけるここき重要な役目を演じないことである。吾々の夢は、何よりも、視覺、吾々が考へる以上に視覺的のものであるといふことである。次のごこきこは誰にでも起るこことである——M・マックス・シモンに於けることきここ——誰かこ夢の中で話してゐる

るその夢の間中を話し合つてゐる、こ、突然、あるちよつこした現象が夢を見てゐる人の注意を呼びおこす。彼は自分では何も話しては居ず、また話されても居ないで、當の話相手の人は一言も口を開きはせず、そう思つたのは二人の間の考への單なる交換であつたので、いかにも明瞭とした會話であつたやうだが、決して、何んにも聞きはしなかつたこことである。この現象は極めて容易に説明される。夢の中で音響を聞くことは吾々にこつて一般的な必須條件である。何も無いところからは何物をも作り出すこことは出来ない。それ故吾々が何か音のする事物の供給でも伴はない時には、その夢は音調を作り出すこことが困難であることを發見するであらう。

まだこ言つた聽覺上のここにここまらず更に觸覺上の感覺に關しても言ふべきことは多々あるが、私は急がぬばならない。次に睡眠中に於ける混亂した觸感から結果された單純な現象について暫く語りたい。これらの

感覺は、吾等の視野を占める形像を一所くたにこんぐらかつて、その唯一の方法に従つてそれらのものを變更し或は排列する。時を夜中に軽い着物が身體に接觸するのを感じて急に自分が軽い着物を着てゐることを思ひ出す。それで、もし自分の夢がその瞬間に街道でも通つてゐるところを見てゐるのだつたら、自分はこの單一な服装で通行人の眺めるまゝに出現してゐて、こんなみなりをしてゐたらさぞ彼等を驚かすことだらうといふ思わくなんぞはないのである。吾々は自身が夢の中で驚いても、その通行人達は一向驚いては居ない。私は此の夢は屢々起ることなので引用した。この外に吾々が數多く經驗することがある。それは空中に於て大氣を通つて飛んだり浮んだり感じさす仕組についてだ。一度この夢を見ると、きつと又くりかへすものだ。そして其の度毎に夢を見てゐる人は心に思ふのである。「自分は以前にも夢で飛んだり浮かんだりする幻覺を抱い

たが、しかし今度こそは本物だ。もはや人間は引力の方則から自由になることを確に證明された。所が、不意に此の夢から醒める時、諸君はこれを即座に分析して見やうにしても、一寸手に合はないのである。諸君は自分の足が地上に觸つて居ないことは如何にも判然と感じてゐることを見出すに違ひない。そして、にもかかはらず、自身が眠つてゐることは信じては居ないのだ。だから自分が下に寝てゐるその實際の有様は忘却してゐるのである。それ故に、自分は下に横臥しては居ないことになる。従つてその足も大地の對抗を感じなくなるに至り、結論としては自然空中に浮動することになる。此のことも又注意されたい。それは空中浮動には飛翔の伴ふことである。そして其の一方のものは只飛行することゝ努める。であるから若し其瞬間に諸君が醒めたならば此の働きは自分の横臥してゐることにかゝつてゐる、またその飛ぶことに骨折ることゝの感覺は寢床に對する諸君の身體

の壓迫によつて實際的な感じで符合されたものであることを發見するであらう。此の壓迫の感覺は、その原因を分解するに、一の純粹で單一な努力の感覺と、空中浮動の幻覺とが結合したものであつて、夢を産むのには適してゐるのである。

夢はいかにしてなるか

かゝる壓迫の感覺が、所謂吾々の視野の水準に昇つて來て、そこに（視野）ある一面の輝く塵埃の助けを借り、その影響を受けて種々な形像と色彩に轉化されることを見るのは興味あることである。M・マックス・シモンは奇妙な何かしら苦痛に充ちたやうな夢を見たことを告げてゐる。彼は向ひ合つた高さの不等な、金貨の二つの推積に對立して、何か理由があつてかそれとも他のことと之を等しくしやうとしてゐる夢を見た。が彼はそれ

（を等しくすること）を仕上げることが出来なかつたのである。之は過度な苦悶の感じを産んだ。此の感じは、一刻一刻増して行つて、結局彼を醒ました。彼はそこで自分の片方の足が蒲團の折目でかぶさつて其の爲に兩足の平準が異なり、兩方一所に伸ばすことの不可能な工合になつて居たことを認めた。此の不同の感覺は、ある突入が視野の中に行はれ其處で一箇若くばそれ以上の黄色の班點と出會はして（かゝることは少くとも私の提案にかゝる假説であるが）、自ら二つの不同は金貨の堆積となり之が見へるやうに表現されたのである。されば、かく睡眠中には觸感の内に固有なる、それらの感じを可視的にしまた夢の中にこゝういふ形態を備へて入り來るところの一種の傾向がある。

更に觸感上のこゝよりもまだぐ重大なこゝのあるこゝを、正しく言はねばならぬ、それは屢々内部的觸覺と呼ばれ、全有機体の諸點より出で、

またもつと稀には、内臓から来る奥深く位するところの感覚についてである。誰もこれらの内部的感覚について睡眠中に於て受けるところの、明確ささ、鋭利な度合とを考ふることは出来ない。それらのものは醒めてゐる間と同様に疑もなく既に立派に存在して居る、けれども吾々は實際上的行動によつて亂されて居る。吾々は自分等の外で生活する。然し眠りは吾等の内に自らを引きこもらす。よく人には度々喉頭炎、扁桃腺、なごの病症が起るに、夢でその人は自分の咽喉の或る部分における嫌な疼痛に關した感情や經驗によつて襲はれる。醒めて見るに、もう何んにも感じない、で其は一箇の幻覺だに信じて失ふ。が暫時経つと其の幻覺は眞實となり出すのである。そこには引用された疾病や眞面目な出來事、癲癇の發作、心臓病其他のものがあつて、丁度、豫見されたやうな工合で、夢中に豫言されるのである。吾々は何も驚くことはなく、これからして、哲學者であるシ

ヨーペンハウエルの言ふやうに其の夢の中で交感神経系統より動搖して發散し來る、意識の中心における、反應を認める。そしてまた心理學者であるシエルネルの言ふやうにかの夢中に表はれ、よくある、象徴のかたちで決斷する夢の刺戟力をば吾々の各機關に歸し、結局物理學者たるアルチグユースの言ふやうに、所謂、或疾病の診斷として夢を取扱ふ方法の、夢中に於ける徵候學的價值に關する論文を書くことになるのである。更に最近に至つては、前述したことのある、エム・シツサーが、いかに特有な夢に於て、それが消化、呼吸、循環作用の性情をいつたもの、ために結合されるものであるかを示した。

私はびつたりと言ひたいことを約言する。吾々が自然に眠つて居る時には、よく想像するやうに、その人の感覺は外的感覺に對して封じられるといふことは必ずしも信じる必要はないのである。吾々の感覺は活動に繼續

する。事實、それは不正確に、活動する、しかしその報償として夫は吾々が醒めた時には忘却して認知しないところの『主観的』の印象の一團を包含する——いふまでもなく吾々は萬人に遍通な知覺の世界に生活してゐるのであるから——でその感覺は夢中に再現するとき、吾々はたゞ自分獨りのために生活する。かくのごとく吾々の知覺の能力は、睡眠中に於てはあらゆる点で狭搾されたところから遠のき、それとは反對に、少くも或方向に、その動作の範圍中にをいて擴張されるのである。外延中に贏ち得たところの、張力のうちで、勢力の屢々失はれるところは事實である。それは吾々に混亂した印象を齎す。この印象が吾々の夢の實質なのである。けれども其等のものはたゞ實質に過ぎないから、それでもつて夢を作り出すといふことは未だ不十分である。

それらのものが夢を産出するに不十分だといふ理由は、いかにも漠然と

して不確實であるからである。それらのもの、演じる主要な役割といふのは只吾らが眼を閉じた時に目前に展開するところの、色彩や形態の變化といったものをやるに過ぎないのであつて、決して一点一畫明白な輪廓をもつたものではないのである。此處に白い背景の上に黒線が在る。それは夢見者にまつて書籍の頁、または暗い鎧戸を待つた新築家屋の正面、あるひは其他種々様々な物と見えるのである。そうした選擇を行ふものは何んであらう？ 此の不決斷な實質に對して決定的な押印をほごこす其形態は何んであらう？ 此の形態をなすものは實に吾々の記憶なのである。

先づ最初に一般の夢なるものは何物をも創造しないといふことを注意すべきである。疑ひもなく其處には藝術上、文學上のはたまた科學上に關した夢の産物の數多き例證を引用することが出来る。私は十八世紀に於けるヴ#オリン作曲家の、タルチニに關する有名な逸話を想ひ起すのである。

彼があるメナタの作曲をしやとして強烈な瞑想に耽けつてゐるうちに、彼は眠りに入つて、悪魔が彼のヴェオリンを把つてその慾求してゐたソナタを巧妙な腕前で奏したのを夢に見た。タルチニは醒めてからそれをば記憶から引だして書きしるした。それが吾々の昵懇なあの「悪魔のソナタ」と稱されるものである。さはいへ、こうした舊い事柄を注意して、歴史と傳説との間に存する異同を辨別することは大へん至難な事である。吾々はその事の確實さを極めるには自己省察に據らなければならぬ。私は今の場合英國現代作家、スチブソンエッセイの例より以外には何をも見出さないのである。極めて珍らしい論説『夢に關する章』(“A Chapter on Dreams”)の中で、此の著者は彼の夢中に於て組立てられ、少くも素描スケッチされたる物語ストーリーがいかにも獨創的である事をその稀有な才能でもつてそれを一々吾々に解剖し、説明してくれた。然し其章を注意深く讀んでみる。諸君は彼スチブ

ソンの生活の或時期に於て、それが眠つてゐるのか醒めてゐるのか何ちらも彼自身では覺えないところの習慣的な精神状態の存したことを認めるであらう。それは自分にまつては眞實であるのだ。心が創造するときは、其時こそ、この困難を征服して、問題を解決するに必要な構造組織の効果をもち、生動する想像作用を産み出すに至るものである。こゝを私は言ふ、そしてこれは吾々が全々眠つて居ないか、または少くも働きつゝある吾々の身心の一部分が眠つてゐるのであつて睡眠のそれとは異つてゐる吾々は、それ故に、彼の作物を指して夢であると言ふことは出来ないのである。睡眠中では、確に言ふが、吾々の全人格を奪ふかの睡眠中では、それは記憶である、吾々の夢の織物を編むところの外ならぬ記憶である。けれども吾々は絶つてそれらを認識することはないのである。それら(記憶)のものは醒めてゐる間は忘れられてゐる。こゝの吾々が、過去の極め

て暗底^{ソソコ}からやつて来る、大へん古い記憶なのである。それらのものは、屢々、覺醒中に於ては、殆ど認めがたない、混亂した認識の事物の記憶である。或はまたそれらのものは彼方^{あちこち}此方^{こち}で拾ひ集められ偶然に混り合つた、全体として曖昧で不可解を極めた支離滅裂な記憶の碎片であるのである。かゝる奇怪な心像の集合は何んら尤もらしい意味を現はさないものであるが、いま此の心像に直面して、吾々の智識は（それは睡眠中の推理能力に委してゐたところからは遠ざかつた）この空隙を充すべき、一箇の説明を探究するのである。それは前述の記憶にも劣らない同様な種々の畸形や矛盾を持つて屢々自ら表はれるところの、別箇の記憶を呼び出すことによつて充填されるのであつて、その記憶たるその中に自ら新らしい説明を要求して、限りもなく存在する。然し乍ら私は此の点を短時間に詳論することゝは、こゝでも爲し得ないから、こゝで自分に適當^{ふさわ}しいことは、かくいふ自分の陳

べたところの質疑について順次答へて行くことである、さて然らば夢に於て別種な感覺の爲に俱はつた物質の構成力や、かの夢見者がその眼から、その耳から、はたその身体のあらゆる表面に、内部に受けた曖昧にして朦朧な感覺の對象を正確な決定でもつて轉化する力は、各れも記憶のなす業であるとする。

記憶の役割

記憶！ 覺醒状態に於ては吾々は如何にも心境のまゝに、出沒顯滅する記憶なるものを有してゐる。こはいへそれらのものは常に吾々の現在の境遇、吾々の現在の作業、吾々の現在の行動に伴つて結合された記憶である。私はいまエム・ド・エルベの夢に關する書物を思ひ浮かべる。といふのは私が論議したところの夢について其の動作が自分の記憶の能動性の一方向

のうちに昇り行くところの題目に關してである。吾々の醒めて居る時に引起す記憶は、それらは最初は動作としてほんやり、表はれて來るものだが、常にそれは何かの方法で結ばれてゐる。動物に於ける記憶の役割は何であらうか？ それは彼を(動物)その境遇に應じて呼びかけ。以前に類似の境遇で起つたところの有益だつたり有害だつたりする結果を思ひ出させて、かくかくの場合にはいかに爲すべきであるかといふことを順次教へて行くのである。人間の記憶は疑ひもなく行動の奴隸ではないが、しかし未だにそれに執着して居る。吾々の記憶は、與へられた瞬間のいかなる時といへども、完全にして強固な形態を備へてゐて、金字塔のごとく、事實、その立脚点は吾々の現在の動作の内に正確に嵌めこまれてゐるのである。こは言へ吾々の作業中にかゝらつたりまたそれ自身の意味によつて示されるところの記憶の背後には、違つたもの、夥しく異つたものが存在して

それらは意識によつて説明された場面の底に貯留されてゐる。如何にも、私は吾々のあらゆる過去の生活が其處に在ることをほんとうに信じる、最も微小な細目すら其處には蓄へられてゐて、それ故吾々は何一つ忘却し去るといふことはないのである、だから吾々は残存してゐる不滅性の、この自分らの意識の最初の覺醒からして、すべてを感じ、認め、思ひ、意志するのである。然し乍らこうした朦朧たる淵中に保存された記憶のうちには目に見えない幽霊の仕組が存してゐる。それらのものは、多分、光に向つて熱望してゐるのであらうが、しかしそれらはそれに昇らんこ努力することすらしては居ない。それらのものはそれをするここの不可能であるここのを知つてゐてしかも私は、一箇の生活し動作するものであつて、私自身それらのものこ一所に働くもつこ他の或るものを有してゐるのである。然しここで、與へられた瞬間にこのここのを想像して見る、私は現在の位置現在の

動作の中に無關係となつて行く——つまり、前以つて私の記憶を固定し導行したところの總べてのもの、内に無關係となつて行く。かういふ風に想像する、即ち言葉を換へて言へば、私は眠つてゐるのである。するに之等の記憶は、障碍を取り去つて、あの意識の床下におし込められてゐたところの揚蓋をあけて、それらの記憶は其のこん底からあがつてくる。それらのものは登り、動き、その無意識の夜中で氣味の悪い大舞踏を演じる。それらのものは一所になつて左の少し明いた戸の方を目がけて一散に走り出す。みんなそれを通り抜けやうに欲する。けれども出来ない、そこには餘り多勢のものがゐる。この大勢の中から呼び出されるものはこれで、また何うしてそれは選ばれるのであらう？それは別段難かしいことはない。先づ私が目醒めた時に、その記憶は自分の周囲で見たり聞いたりする事柄を伴ふ、現在の場合の權限に關係ある事に包まれた行方で逼つてゐる。今そ

れは自分の視野のうちに層一層朦朧な影像となり、耳にはだん／＼曖昧な音響として感じられ、身体の表面には次第に不明瞭な感觸を傳へるのであるが、然し乍ら其所には又こゝした有機体の最も奥深い部分から出てくるところの更に無数の感觸が在するのである。されば、この故に、かゝる幽靈じみた記憶は色彩をもつて、音調をもつて、簡單に言へば形体をもつてそれ自身を充たすことを希望するのであつて、其内のただ一つは吾々が認めるところの塵彩^{カラーダスト}をもつて自らを同化したところのものであり、その外面的並に内面的感觸のそれは吾々が把持するところのもので、其他、そしてまた、その上に、吾等一般の可感性の感動的調子にも應ずるところのものである。*此の一致が記憶と感觸との間になされたとき、吾々は夢を見るのである。

41
*著者の覺書(一九一三)これはフロイド其他の心理學者の所謂『抑壓された慾望』

さして介在する特殊な心理の状態であり得やう、特にアメリカでは、こうした洞察を機敏とて研究されてゐる。(特殊なる最近発行にかゝるモルトン、プリンス博士著ポストン発行の「變態心理學雜誌」を参照)以上の論述をなした時に(一九〇二)夢(Die Traumdeutung)についてのフロイドの學説は既に公表されてゐた、しかし「精神分析」は今日行はれてゐるやうには發展しては居なかつたのである。

(HB)

夢に於ける身體と心との状態

プラトリーの解説者であり祖述者であるプロチヌスの哲學者、エンネエドスの詩的章句の内には、人は如何にして生に來たのであるかを説いてゐる自然さいふものは、彼の言ふところによれば、生ける身體のスケッチであり、そのスケッチたる唯一のものなのである。自然は彼女の力を措いては決してその仕事を完成することが出来ない。また一方では、心は觀念の世

界に住んでゐる。それは行爲に對しては無能力であり、たゞ行爲を考へる事とさへ駄目なのである、しかもそれは空間を超へ時間を超へて浮動する。扱て此身体には、特殊な形態でもつて特殊な心の願望に應答するところのものがあつた。またさうした心の間にはある特殊な身体のなかで各自が認知し合ふところのものがある。其の身体は自然の手から全く養はれ來つたのではなくして、それは完全な生命を與へて呉れるはずの心をめがけて高揚する。その心さいふのは、身體に對して見はりをしてその唯一なる影像をば鏡の中で見るやうに認めて之を信じ、それに引きつけられ、その影像ゆゑに惑はされ、自らを落しめ。墮落する、しかもこの墮落こそ生活なのであると。私はこうした分離された心さああの朦朧たる無意識中に飛び込むところの記憶を比較してみる。一方、吾々の夜間に於ける感覺はこうした不完全な身體に類似する。その感覺は暖かさをもち、色ざられ、顛きまた殆ど

生々してはゐるが、しかし漠然としてゐる。その記憶は完全であるが、稀薄で氣が抜けてゐる。その感覺はその不明瞭な輪廓の形狀の上にある形態を見出さうと欲して居る。その記憶はそれを充實させ、それを鞏固にする爲につまり言はゞそれを実現さそうがために物質を受け入れる。それらのものは各自牽つぱり合つて居る。そしてあの幽靈じみた記憶は肉と血を齎したところの感覺の中に化身して、其の唯一なる生命をもつて存在する。これ夢なるものである。

知覺の機械作用

夢の誕生には此の故に神秘めいたところなどは無い。しかも吾々の一切の知覺の誕生にそれは似通つて居る。夢の機構は、一般的に言ふと常態の知覺のそれと同一である。吾々が現に目前に見ゆる、實在の物象を認知して

45

ある場合——その物象は吾々の知覺によつて認知され得るもの——吾々はその物に自分達の記憶のそれを附加して對比することなどは殆どしない。諸君が書物を読んで居るとき、諸君が新聞紙を通覽して居るとき、諸君は自分の意識中にその印刷された文字の全部が實際に這ひつて來ることを想像出來るであらうか？ かゝる場合諸君は一枚の新聞紙を一日中かゝつても尙且つ讀むことは難かしい。實際諸君の見るものは一々の單語の中で、又一々の語句の部分の中ですら、たゞ或る文字が特殊な記號についてのみであつて、かくして充分残る部分は判讀し行くのである。残された全体の部分は、諸君が考へ見るところのものであつて、諸君は事實上自分で一種のある幻覺をそれに與へる。此の點については疑ふべくもないところの残された夥しい決定的な實驗がある。私は茲ではたゞゴールドシエイダーとミニューラーとの例について引用しやう。こうした實驗者達はある一般的な

方式によつて記述し、または印刷してゐる。「許容されぬ獨斷」『第四版の序』曰く何々といつた工合に。扱て彼等は言葉を不正確に、變形し、あるひは文字を省畧して記すことに注意を拂つてゐる。こういった文章は*暗室の中で表示される。まづ被験者はその文字の表示される前に置かれるがはじめのうちは何も書かれないから、それについて知るころがない。するに一瞬時ある文面が電光によつて照し出される。これに要した時間はその被験者にとつてその文字の全体を知覺するには餘りに僅少の間なのである。實驗者達はこの實驗によつてアルハベットの各一字を見るに要した時間を決定しはじめ。かくして容易くある方則が立てられる。其の結果としてかの被験者は三十字内至四十字に對して、八字内至十字以上は知覺し得ない。それで、通常、彼は難なく完全な單語を讀むのである。が然しこの實驗における点は吾々にまつてより以上に教ふるころはない。

若し觀察者がその被験者に彼の確に見たころの文字は何んであつたかを探ねるに、勿論、彼の見た文字についてはそれが實際に書かれてあつたものに相違ないことを言ふであらう、所がそこにはまた缺けた文字や他のもので置き換へた文字や省畧された文字があつたのである。そこで被験者は在りもしない文字を、ま、ま、まその照明中に見るのであつて、もし此の文字が常識で判斷されるものならば、直にその語句のうちには入つて行く。此の目に實際に感知したころの文字はたゞ其の被験者の無意識的な記憶の表示をなすためにばかり利用される。此の記憶は、適應された記憶として露れる、即ち、その實現のために發動する形態の方式によつて見出される。その記憶は表面上ある幻覺的形象のうちに投出される。被験者の見たものは夫等の言葉ではない。かく迅速に讀み得るころは夫を豫察する偉大なる働きがあるからで、此の豫察といふころを引き去つてはそれは成立しない

のである。夫は機を得てその場に現れ來つた記憶の形態化であつて、夫はそれ自身次々完全に表示する此處彼處に見出されるところの部分的實現である。

*此の暗室における實驗用の装置は電氣仕掛によつて開閉自在に僅少時間その閃光を受けて被験者に認知せしめる文字を挿入された、實驗心理學應用機械の一種タキスコープを指す。(譯註)

夢の機械作用

かくして、かの覺醒状態やまたは吾々をこりまく眞實なる物象の智識の中では、ある動作は宛も全く夢の時と同じ性質で間斷なく進行して居る。吾々は單なる對象の一つのスケッチを認めるのである。此のスケッチは完全な記憶に對して訴へる、そして此の完全な記憶は、それ自身無意識であ

り又は心的状態の單純なものであるが、機にふれ事にふれて獲得されて來たものである。斯ういつた種類の幻覺は吾々が認知するところの眞實な構造に嵌め込まれる。それは極く僅少な過程をもつて、物それ自身について見えるよりはすんと迅速にやつてのける。しかのみならず、そこには又こゝうした動作のうちに記憶の影像の取扱ひや、その構成に對して施される數多の興味ある觀察がある。それらの物は吾々の鈍い印象の状態にある記憶中に存するこいふこいは想像する要はない。それらは張りきつてたり弛んだりする汽鐘の中の蒸氣のやうなものである。

此の瞬間に其の認知されたスケッチはそれを目前に呼び出し、宛もそれらが其の關係を類似の点で親密に團結されたやうになる。ミュンスタールベルヒの實驗は彼のゴルドシェーダーやミューラー等よりも早く行はれて此の假定を説明した、勿論彼等の爲した目的は種々異つたものであつた。

ミユンスターベルヒは其の言葉をはつきり書きつけた。しかも、それらの言葉は、普通の語句ではない。それは臨機に處して孤立された言葉だつた。此處でもまた夫を充分認知するには短かすぎる時間の間で曝はれる。今被験者が記された言葉を見て居る時に、あるものが彼の耳へ何か他の皆目違つた意味の言葉を話す。するにこんな事が起る、即ちその被験者は自分の耳へ話された言葉の意味で呼び起こされた、よくある形に似通つてはゐるが、その実際には何も書かれては居ないところの言葉を見たに述べるのである。例へば、書いてある言葉が "tumult" (騒擾) であつて、話された言葉が "railroad" (鐵道) であつたとするに被験者は夫を "tunnel" (隧道) と讀む。書いてある言葉が "Trieste" (譯註地名) (アドリアの海北岸) で話された言葉が獨逸語の "Verzweiflung" (despair = 譯註絶望) であるに、被験者は "consolation" (慰藉) を意味するところの "Trust" を讀む。それは宛も "railroad"

こいふ言葉が其の耳の中へ、うつゝに、それは知らずして、しかも尙ほ何か "railroad" (car. rail. trip など) の觀念に關係ある記憶集團のうちに表現化されるのである。そして是は單なる一箇の希望であつて、しかも意識中に出て来るやうに繼續されたところの記憶は既に實現をはじめ、現に働きつゝある感覺のそれである。

斯のごときが眞實の知覺の機械作用であり、また夢の機械作用のそれである。此の兩者の場合に於て、一方のものは、感覺機關の上になされた實際の印象であり、そして一つの方は印象中に包まれて其の活動に依つて再び生活上の事に戻り來るところの記憶の上になされたものである。

然し、そうするに、一体知覺するにこゝと夢見るにこゝとの間の肝腎な相違は何んであらう？ 眠ることから何であらう？ 私は問ふことを止める、理由は、如何にも睡眠に就ては心理學的に説明されて來たからである。そし

て斯う言つたことは特殊な問題に涉り、其の上それは此處で考究してゐる事柄からは遠いものであるからだ。私はそこで心理學的に見て、いつたい睡眠とは何んぞやとゞしてみる。吾々の心は眠つて居る時でもその働は繼續してゐて、それは丁度吾々が感覺と記憶の上に、覺醒の時に類似した要素に見るがごとく働いて居る。そしてまた或る似通つた様子でそれらのものを結合するのである。吾々は一方に於ては正規の知覺を有するが、また片一方では夢のごときものを有つのである。私は繰り返へす、では其の相違は何であらう？睡眠状態に關する心理學的特質とは何に？

吾々は理論については疑はねばならぬ。此の點に關する無數の事柄のうちで。或者は言ふ睡眠は外物に接した感覺の外面的世界からは自ら絶縁して成り立つたものである。然し乍ら吾々は自分の感覺が睡眠中に於ても行爲に繼續して居るといふことを指示された。それ故それらのものは其

の外廓のものを持つて吾々を規定し、或は少くとも吾々の夢の重大なる出發點をもつて吾々を規定する。或者は言ふ、『眠りに入るに云ふことは心の高い能力の働きを止めることである』。そしてそれらのものは最高な中心に於ける瞬時の痲痺の一種であるを告げる。私は是をもつて如何にも正確なことだと考へない。夢中に於て吾々は疑ひもなく論理上の差別は立てないけれども、然し夫れだからといつて論理の無能性を表はすものは言へない。其處には往々にして正確な又は時に煩瑣でさへあり得るやうな理窟を伴つたところの夢の存することがある。私はもはや、一見逆説にさへ見ゆるやうな危険を冒して言はふ、こいふのは夢見る人の誤謬は屢々其の夢が餘りにも理窟に合ひ過ぎるからだといふことである。もし彼にして其の夢を組立てるところの影像の進行に對して、もつと單純な見物人となつてとゞまつてゐるさへしたら、其の荒唐無稽を避け得た筈なのである。所

が彼が其ここの説明せられるこゝを強いて願望した結果として、その説明は、矛盾した影像イメージに一所くたに縛りつけられ、とても較べものにもならないやうな無稽に近い、奇怪千萬な理窟を持ち出したのである。私は實際、吾々の高尚な智能は睡眠中に於ては弛緩することを認める。そして大低夢見者の論理は大變薄弱脆弱なり時には論理の上のつまらない狂文まじりに類似するこゝを認める。だから夫は理窟の廢止にもとづくものではなくして、もつともつこ感覺の結合に依つてなされるものである。こゝをもつて吾々はあのやうな特性づけられた夢を見るのである。

これ以外にも、もつこ他の肝腎なこゝがある。吾々は多くの理論よりも一箇の事實を要する。吾々は事實上の内心に觸れるこゝろのものものを要するのである。そしてその人はそれ自らの上で決定的な實驗を爲すべきである。吾々が夢の中で自身でそれを分析するこゝがもはや出來ないでゐるとき其

の夢の醒めぎはにおいて、睡眠から覺醒にいたる移動、出來るだけ正確な移動を看視するこゝは必要なこゝだ。だが是は非常に困難であつて、たとその注意力を待つてのみ成就せられるであらう。扱て次に、著者の自身で經驗した、夢の醒めぎに於て成就された新らしい夢について語るこゝを、許してもらひたい。

今この夢見者は或る集會場に立つて話して居る夢を見たのである。彼は議會で政談演説をやつてゐる。すると傍聽席の真中でざわ／＼いふ物音が起り、其のざわめきは次第に増大していつて、ぶつ／＼いふ聲になる。それから夫は唸聲にかはり、恐ろしい騷擾となつて、終ひには其處ら中全体が一齊に聲を揃へて：Out! Out!! (うせろ! うせろ!) と叫び立てる。瞬間に彼はさめた。一匹の犬が隣家の庭で吠えて居たのであつて、其の：Wow! Wow!! (ウオーウ! ウオーウ!) とわめく一語一語が：Out! Out!! (うせ

ろ！うせろ！とがなり立てるのと同じやうに聞こえたのである。いかにも、茲に夫を把捉するに有要なほんの僅かばかりの餘祐がある。

丁度そこに再現した、さめて居るころの自我は、尙ほも其場に存在してゐる夢みる自我の方に顧みて、少くとも數瞬間、夫を解き放さないで握つて居る。「俺はお前を握まへた！お前はそれは群衆の叫びであり、またそれは犬の吠ひ聲だぞ考へる。お前がしたことをすつかり俺に話さない内はめつた、こはなしはしない！」すると夢みるころのものは是に答へるであらう、「俺はなんにもしなかつたのだ。そして是は正しくお前と俺とがてんで、いがみ合ふ事なのだ。お前はまづ犬の吠ひてるのを聞いて、その吠えた奴は犬だこいふことは知つてゐても、自分が何もそうしたのではないといふことを想像する。夫がそも／＼大した間違ひだ。お前は非常な骨折でもつて、それを別段怪しみもせず、そうだこしてしまふ。お前は其の

完全な記憶を引き出して、ぎつしり積み込まれたあんなだけの經驗を取り出して、此の驚くべき記憶の集團を只一點の上に持つて來て寄せ集める。斯のやうに音響の中へきつちり嵌め込む方法で、お前は夫に一番適合した自分の記憶の一つを聞いたのである。否、お前は其處にはお前が引き出した記憶の最少の齟齬もないこ自分で認めるやうな自然なまゝの感覺の結合を得ねばならない。そのとき丁度何かお前は夢を見るに至るであらう。此の排列はお前はたゞ記憶の骨折に依つてのみ得られるばかりだ。それは丁度仕立屋が一着の上着を新調するのにお前の身体の格好に合はせて、布切を引つ張り廻して其の上に留針をして行くやうなものである。お前は、そこで絶えず、終日のあらゆる瞬間を莫大もない努力を爲すのである。お前のさめて居る時の生活の有様は一箇の労働者の生活である。よしお前が何んにも爲て居ないと思つてゐる時でさへそうなのだ。何んみなれば瞬間に

お前は選擇し又次の瞬間には排斥する。お前はお前の感覺のうちで選擇する。それはお前が夜眠りに就くときに戻り來るころの、千萬の主觀的感覺である意識から嘗つて排斥されたところのものなのだ。お前はまた極度の正確さ、微妙さとして、お前の記憶の中で、お前の現状には、確に適しない嘗つて排斥したそれをば選擇する。此の絶えず成就するころの選擇、此の間斷なく更新する適合と云つたものは、普通感覺と呼ばれる最初にして最上な本質的狀態なのである。然し之等一切のものは連續せる緊張の狀態中にお前を守るのである。お前は大氣の壓力を感じるころ以外には、お前は其の瞬間にそれを感じることは出來ない。が夫は久しきに渡るころお前を疲勞さす。普通感覺は大變疲勞するのである。

「それで、俺は練り返へす。俺はたしかに俺は何んにも爲たのではないと言ふことに就いてお前と争ふのだ。お前が休まずに與へる骨折りを俺は

たゞ與へることを斷るのである。自分を生活に結び付ける所で、俺は夫から自らを脱するので。總ゆるものは俺にまつて無關心になる。俺は萬事に就いて無頓着になる。眠るころは即ち無頓着になるころだ。人はねむるに判然とした境地から無頓着となつて行く。子供の傍にねむつて居る母親は雷鳴によつて起こされることはないが、其の子供の咳で目をさまされる。彼女は我が子の氣づかひに對して眞にねむつて居たであらうか？吾々は吾々に關係を結んで居る氣づかひの中ではわむれないものだ。

「お前は俺が夢を見て居る時に俺のすることに就いて尋ねるのか？俺はいつそのことお前がさめて居る時にお前が仕出かすことに就いて話そう。お前は、夢を見て居る俺を、お前の過去の總計に於ける俺をこゝに取り出す、そしてお前は俺に強いる。俺はだん／＼小さく爲つて、お前の現在の行爲の周圍を歩く小さい環の中に置く。夫は覺醒される。夫は普通精神的

生活として生存するところのものだ。それは闘めぎあひ、意慾する。夢に於ては、お前は俺がそれを説明すべきところの眞實に何か必要なことを有して居るか？夫はお前が自分で意志することを止して、も早や其の單なる一點の上に自らを集中する力を持たなくなつた時、自然に落ち込む所の状態である。説明する爲に更に有用なことは、如何なる瞬間に於てもお前の意志が切に、また殆ど無意識的に享けるところの不思議な機械作用であることだ。お前が一つ又は同じ點の上にある凡ゆる思念、お前に關係したその點について、之を説明することは普通心理學の役目であつて、一つ又は同じやうな、覺醒における心理學の役目なのである。」

夢の無關心性

以上が夢に於ける自我の言つたことである。それは若し吾々が尙ほ勝手

にしゃべらせて置いたなればもつと多くの重大なことについて語り聞かせたことであらう。が茲に、いふのつまり、覺醒状態から夢となつて分離するところの肝腎な相違に就いて約言するならば、夢中に於て其の同等な能力は覺醒時と等しく働くといふことである。然しその一方の場合は緊張の度合を持つて居て、そして他の場合には弛緩の度合にあるといふことである。夢は其の努力と肉体的運動の完全なる精神的生活中に於ける緊張の負量になつたときに構成される。吾々は尙ほも認知して居る。吾々はなほも記憶して居る。吾々はなほも理窟を持つて居る。凡て之等のものは夢中に充ち満ちてゐる。しかもそれは心の領域に。何ら骨折らうといふ意味もなく、豊に充ちてゐる。斯く要求し骨折つた事柄は正確に整理される。此の故に吠ゆる犬の聲はざわめき叫ぶ群衆の記憶に少しの努力も要せずして結び付けられる。こは言へ普通では此の音響は犬の吠え聲として認知されねばなら

ないから、嚴密に言へば勿論努力ささいふここともなされねばならない。夢見
る人に缺如して居るのは此の力であつて、彼は夫によつて、たゞそれのみ
によつて、即ち覺めて居る人から區別される。

此の肝腎な相違からして他の多くの重大なこゝに演繹するこゝが出来て
吾々は夢の主要な特性を理解するに至るのである。が然し乍ら私は此の研
究の組立てのたゞ輪廓だけを與へる。夫は即ち、三つの主要點の上に據つ
て居る。まづ夢の矛盾せるこゝに就いて、時々夢中に分明に表れ来る繼續
の感覺の中絶のこゝに就いて、それから、最後には、其等が合體する爲に
現れる感覺のための争ひ、その夢見者にそれらが自らにして現れ来る記憶
に於ける順序に就いてである。

夢の矛盾して居ることについて説明するこゝは私にこゝつて全く容易いこ
ゝである。夢の特性は記憶の影像と感覺との間に完全な排列を要求しない

で、たゞ反對に、それらの間に二三の演技^{アクティ}をやるこゝを許容する。ひきく
違つたこゝの記憶は似通つた感覺を當て嵌めるこゝが出来る。例へば、
視野の中で白い班點をもつた緑の地點が在るこゝする、こゝそれは白い花の散
在した輝く芝生となり、それは球の轉つた撞球臺となり、まだ他にいろん
な物になる。斯うした相異つた記憶の影像はそれこゝ似よつた凡ゆる感覺を
用ふるこゝが可能であつて、其のあこゝを追つて行く。時々それらのものは
夫を、あれからこれへとおつかけて行く。それ故芝生であつたのが撞球臺
となるので、時こゝするこゝ夫は同時にまた一緒くたになり斯うして記憶の影
像は感覺を結びつけるために、芝生は撞球臺となる。この事からして同時
に於て他の何ものかになつて残される對象の途方もない夢が出て来るので
ある。既に述べたやうに、心はかゝる説明を索め時々それによつて矛盾で
重なつた途方もない幻覺に對應する。

時間の感覺の中絶といふことは吾々の夢に多く存するこゝであつて、それは同様な場合における異つた結果である。夢の中で數秒間は、終日、覺醒状態中において働くところの數々の事件を吾々に實現する。讀者はM・モウリーによつて引用した例を覺てゐるであらう。夫は範典クラシックとなり、またよし近來是について論争されてはゐるにしても。私はそれを眞實らしいこゝであるといふこゝに注意を拂ふ、そのわけは私が夢の文獻のうちに類似した觀察を數多く發見するからである。然しながら此の影像の突進は未だもつて全然神秘なこゝではない。吾々は目醒めた時には吾々は普通の人々と共に生活する。吾々のこの外的並に社會生活に對する注意は吾々の内的状態の繼續を行ふ偉大なる調節者である。それはかの殆ど刻々に發條（ゼンマイ）の伸び縮みする完全に調節され規則正しく區分された時計の平衡輪に似てゐる。夢の中で缺けて居るものは此の平衡輪なのである。其の加

速度は心の領土のうちでその力の徴候はも早や豊ではあり得ない。それは、繰り返へし言ふが、努力を要する精密な整理ではなくして、是は夢見者には缺けてゐるところの几帳面さなのである。彼はもう其の内面にはかの外物に依つて調整されるに必要な生活に對する注意をばなすことは出来ないのである。そして其の内面的な持續は一般的な持續にびつたりと當て嵌まる。

夢の迅速性

今や作動してゐる感覺に等しく嵌め込まれることが出來て、且つ他のものよりは寧ろ記憶の影像に對して其の夢見者が選り出出して考へられたところの夢中に於ける、かの特殊な心の弛緩に就いて施された説明が残されて居る。其處にはある臆斷が流布されて其の影響を蒙り吾々は大抵日中に自

分が特別に氣を入れて居た事柄に關するここの夢を見るものだと言ふことになつて居る。是は時にとつて眞理である。だが然し覺醒状態の心理學的生活の時にもかくして夫れ自身を睡眠のうちに延長するこゝ、それが爲に吾々は眠りにくい。睡眠は吾々がすっかり疲勞して眠つたところからやつて來る斯ういつた様々の種類の夢をもつて充されてゐる。普通の睡眠中では吾々の夢は寧ろそれら自身のこゝに關涉らはつてゐて、他のものも等しくなり、それは迅速にすぎ去るこゝろの想念をもち、また吾々は殆どそれらのものを認知してゐても一向注意を拂はうとしない對象の上にある想念をもつてゐるのである。もし吾々が其の日の出來事について夢を見たのならそれは最も些細な事柄であり、それを再現するに最好機會であり、または最重要なこゝではないのである。

私はこの點に關してはデレーゲのダブルユー・ロバート並にフロイドの

觀察に全然賛同するものである。私は街の中に居た、私はそこで辻馬車を待つて居た、で私は歩道の傍に立つて居たから少しの危険も起らなかつたのである。所が若しも、此の瞬間に辻馬車が通過したとするこゝ、私の心にはその可能性を帯びた危険の感念が掠めさり或はまた私には何も恐怖の意識がなかつたにもかゝらず只だ本能的に我れしらず跳ね上つたものゝ假定するこゝ、私は其の夜自分の身体が車に轢かれる夢を見るであらう。私も早や回復の望の絶えた患者の枕頭を看守つて居るそうしてゐる間中もう駄目なこゝは百もしれ切つてゐるにもかゝらず、若しやこゝいふ一縷の望みをかけて居る。私はすると夢でその病人の癒つたところを見るであらう。私はこんな場合でも、恐くは病氣した夢よりはずつと多く平癒した夢をみる。一口に言へば、夢中に選擇されて再現し來る事柄は吾々が一番氣散じな思考のそれである。そこに於て驚嘆すべきこと、言ふのは何んであらう

夢に於ける自我は弛緩された自我であり。もつとも機敏に集められた記憶は和らげき氣晴しの記憶であることだ。こうしたものはどうも骨の折れる事などには耐けないものである。

熟睡中の夢

非常に深い眠りのうちでは其の記憶の再現を加減する規則に大した相違がある。吾々は殆んどこの深い眠りについては何ごきをもしらない。大概の場合そこいらに有りふれた夢は、吾々がこつくに忘れて失つたところの夢なのである。時をすると、そうはいつても、その忘れられたあるものを取り返へすこきがある、そしてまた吾々が経験するこころのものは大層特殊な、奇異な、名状し難い感覺である。吾々にこつてそれは遙かに空間から遠のき、遙かに時間から距たつて歸へつて來たかのごこくに思へる。そこ

には大變古い感覺、あらゆる細目の中で生活して見せる青年や幼年の時代の光景、それはまた吾々が醒めて見るこもう一つペン復活させようこして求めても駄目であるところのかの幼年、青年時代の新鮮潑刺した感覺をもつて彩色するこころの形態がある。

この正に心理學者が努力して明にすべきである深い眠りに就ては、たゞに無意識の記憶の機械作用を研究するのみに止まらず、更に「心靈研究」に依つて擧げられたこころの神秘的現象に對しても考察をしなければならぬ。私はこの階級の現象に關する意見に就ては敢へて申しださないこきにするが私は斯くも心靈研究の爲の協會によつて倦まざる熱心を持つて非常に嚴格な方法で蒐集された此の觀察のある重要な一事に就いては之に觸れずして避けるこきはできないのである。それは、かの以心傳心(千里眼)なるものが吾々の夢に感應するものであるならば、此の深い眠りのうちで全くふ

さほしくもそれを自現するに絶好の機會であるといふことだ。こは言へ私
 は繰り返へす、私はこの點に關する意見を表明することはできないといふ
 ことを。私は諸君と共にでき得るだけ遠くに進み來つたので、私は今や神
 秘の闕の上で止ままつてゐる。無意識の最も秘密なる奥底を探究すること
 や、既に公開されたかの世紀のうちでその心理學の果すべき主要な仕事は
 吾々がまさに意識の底土と呼んだところの勞作をなすことである。私はそ
 こには、宛も前世紀に於て成就された物理及び自然科学の發見におけるこ
 恐く同様に重大なる、驚嘆すべき發見の俟てることをば疑はないものであ
 る。かくして私の少くも希望し得る一事は、右に述べた事を仕上げた上
 で此の研究を完結したいと望むのである。

（一九二四、四、六午前三時稿を了る）

（大阪府立図書館蔵）

大正十四年二月廿五日印刷

大正十四年三月一日發行

譯者 篠崎初太郎
 發行所 大阪府南區末吉橋通一丁目十四番地
 異端社
 印刷所 大阪府西區阿波野二番町
 日本印刷製本社

【定價 五拾錢】

292
76

著刊既郎太初崎篠

詩集『廢都を行く』
¥ 2

(觀音の秋・南支遊行)

マックス・ウエバア
譯詩集『立體派の詩』
¥ 0.7

兌發社端異阪大

終

